昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十七年九月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第一六二号）

慈光

第十四巻　第九號

目次

教行信証「信巻」三信釈（五）……近角常観…（1）
善財童子の求道……福島政雄…（7）
萬行と一行と大行……花田正夫…（12）
不二見徹照翁……桑野淳城…（14）
堂の鈴……佐藤強三郎…（19）

「教行信証」「信巻」三信釈（五）

近角常観

そこで前席にも言う如く、釈尊のヂャータカは、釈尊の前生の御修行の有様で、釈尊が「前生に於いてかくの如き姿で汝を救うた」といわるるヂャータカの御教化は、要するにあなたが前生に於いて身をすて私のために〳〵として下されたあなたの御修行のお姿である。即ち婆婆往来八千度も皆私共にこのお慈悲を知らすための御苦労に外ならぬのであります。而して其の根本の大根本たる阿弥陀仏の御修行が、今ある法蔵菩薩の御苦労なのである。

処でこの御文なども「仏は斯くして下された故、我々も之を手本とし、之に愧じて善く仕て行かねばならぬ」となると、自力修養になる。ここでうつかりすると、誰でもそうなる処故、そうならぬようによく注意しなければならぬのである。ここは我々がそう出来るなら善けれども、その反対に、我々は悪いこと〳〵をして居る、其者に向わせられて遣る瀬なき大悲の上より御修行なのである。故にこちらは斯く反対な事ばかりして居るに、その者に向わせられて斯くの如き広大の御慈悲と頂き「申訳なし」と頭の下る一念が肝腎であります。

又中には「此方は如何に悪いことをするも、向うから善くして下さるお慈悲である。そのための法蔵菩薩の長の御修行では無いか。故に仏の方より善くして下さるの故、此方は如何程悪しくてもよいのである」と斯ういう風に考えて居る人が、説教を聞きなれて居る人の中には往々ある。これでは結局「向うは何程でも善くして下さるの故、こちらは如何程悪いことをしてもよい」という事になり、お慈悲ということがサッパリ頂けて居ぬのである。これでは余り身勝手すぎるのであります。

ここは「善くしなければならぬ」と力むでも無ければ、「悪くともよい」というも間違いである。両方とも何れもいかぬのである。子供が道楽しても、親は自分の為に貯めといて下された金なれば、何程費つても構わぬとなつては、親の親切は何もならぬのである。

処がまた「汝の親は国許で汝の事を大変心配して居られる」と聞いて「親が心配して居るそうだから、これから善

くしなければならぬ」となつても、中々その通りに行えぬのである。

処がここに「汝うか〳〵として居るも、親は国許で汝の身を心配して一刻も汝を忘れず、夜更けまで汝のためを思いて自ら機を織り、自から仕立てて送られた一枚の着物であるぞ、親は汝の悪い事をスッカリ知り抜かれ、そのして見よう無き汝に着せんばかりに、選りに択つて、その一枚の着物を作られたのであるぞ」と、これを明かにされた一念には「これではすまぬ」ではない、「あゝそれ程までとは思わざりしに、斯くまで広大の御親切であつたか」と、じつとして居るに居られなくなり、その広大の御親切を聞く一念に、止めんとつとめて道楽を止めるのでなく、聞く一念に「さては〳〵その遣る瀬なき大悲なりしか」と、今迄の心がコロリと一遍にかわつて仕舞うのである。そのかわるは自分でかわるに非ず、この広大の親心を聞かせて貰うた一念に、一時に融けて仕舞うのである。滅んで仕舞うのであります。

故に親鸞聖人のお示しが、皆これである。例えば『和讃』では

本願円頓一乗は　逆悪摂すと信知して
煩悩菩提体無二と　すみやかにとくさとらしむ。

無碍光の利益より　威徳広大の信をえて
かならず煩悩の氷とけ　すなわち菩提の水となる。

罪障功徳の体となる・氷と水の如くにて
氷多きに水多し　障りおおきに徳多し

「罪障功徳の体となる」などと、あたり前で、我々の悪が功徳などになるものか。この罪業の者を飽くまで捨てぬとの広大のお慈悲の熱に懸るもの故、罪障の氷が融けて功徳の水となるのである。「我々は氷である。仏のお慈悲は熱である、熱によりて氷を変じて水にしなければならぬ」など、思うて居るのでは駄目である。

この広大のお慈悲の熱は唯の熱で無く、飽くまでこの私の氷を解かそうとの熱なのである。故に一念「この氷の私を」と、ここのお慈悲に気がつく時は、如何な強情我慢の私も、最早我慢張りては居られず「これはしたり〳〵」と、氷がそのまま功徳の水に解けて仕舞うのであります。

故にここの処は、私の罪障の深い処へ、仏のお慈悲の遣る瀬無さを直接に頂く事が肝腎である。喩えて言えば、襖一重隔てて仏と我々と別々に在るのではいかぬのである。世間の大抵の人が言わるるのは、どうも襖一枚隔てた話故困る。多くの人はその間に襖一枚の隔てがあつて、そうして「このような仕て見よう無い者故、広大のお慈悲であ

る〳〵」とこちらから仏に向うてるのである。これでは何時までやりても駄目である。又自分は悪い事しておいて「仏の方より此者を善くして下さるのである〳〵」と言つて居るのも、矢張り襖一重の隔てがあるからである。

然るに私が、斯く現に悪しき心を起し、色々自分で計つて苦しんで居る。それを御覧下されて、仏の方より襖を押し開き、飛び込んで「汝、何して居るか」と言われた時には、最早、善くして下さるも下さらぬも言うては居られぬ、唯々お慈悲の広大なるに感泣する外ないのである。すべて仕事は仏の方よりして下さるのであります。

又次ぎには

『……勇猛精進にして志願倦むこと無し。専ら清白の法を求めて群生を恵利す。三宝を恭敬し、師長に奉事して、大荘厳を以て衆行を具足して、諸々の衆生をして、功徳成就せしむとのたまえり。』

其の我々の有様を哀みて、大悲大願を起し、御苦労して下さる有様は、勇猛精進にして、其の御志、寸刻もゆるませらるる事は無い。又清白の法とあるは、善導大師の二河白道の白道と同じで善法である。善法を白に名け、悪法を黒に名くるのである。その清白の法を求めて、諸の群生を恵利して下された。又仏法僧の三宝を恭敬し、師長に奉仕して大荘厳を以て、あらゆる衆行を具足し、あらゆる衆生をして功徳成就せしめ下された、というはその長々の御苦労遂に凝り塊りて、万行具足の一南無阿弥陀仏を御成就下され、これを衆生に廻施して下さる事をお説き下されたのである。これ即ちさきに

『如来清浄の真心を以て、円融無碍、不可思議、不可称、不可説の至徳を成就したまえり。如来の至心を以て、諸有の一切煩悩悪業邪智の群生海に廻施したまえり」

とある処である。総てここの処は、仏が我々欲覚・瞋覚・害覚の悪しきを哀れみて、長々常にその者に附き添うて、泣いて下されたる如来の至心までを示し下されたのであります。

○

次は、

無量寿如来会に言く。仏阿難に告げたまわく。彼の法蔵比丘、世間自在王如来、及び諸の天・人・魔・梵・沙門・婆羅門等の前に於いて、広く是の如きの大弘誓を発して、皆すでに成就したまえり。世間に稀有なり。この願を発しおわりて、実の如く安住し、種々の功徳を具足して、威徳広大清浄仏土を荘厳せり。是の如きの菩薩の行を修習せること、時に無量・無数・不可思議・無有等々、億那由他百千劫を経たり。内に初より未だ曾て貪瞋

及び痴欲害恚の想を起さず。色声香味触の想を起さず、諸の衆生に於いて常に愛敬を楽うこと、猶親属の如し乃至其性調順にして暴悪あること無し。諸の有情に於いて常に慈忍の心を懐き、詐諂ならず、亦懈怠なし。善言策進して諸々の白法を求め、普く群生のために勇猛にして退くことなく、世間を利益して大願円満したまえり、と。略出す。

こは『無量寿如来会』というは、今の『大経』の異訳の経である。この経文を聖人は好んで御覧なされたと見え、始終この御経を引いてお出でになるのである。今も即ち前の『大経』法蔵菩薩修行の有様を重ねて斯の経によりてお示し下されたのであります。即ち殆んど『大経』の御文そのままである。即ちここに法蔵比丘とあるは法蔵菩薩のことである。その法蔵菩薩の御苦労の様をお示し下されて、茲にはどうあるかというに、法蔵菩薩、世自在王仏の御許に於いて、広く諸天魔梵等の八部の大衆の前に於いて、我々のために大弘誓を発して皆すでに御成就下された。大弘誓というは法蔵菩薩の願は唯の願でなく、この願満足せずば正覚は取らぬという誓の附いてある願である。故に大弘誓と示されたのであります。

してその発願後、その実の如く、長々の御苦労を経て、種々の功徳具足して、威神力功徳広大の仏土を荘厳して下された。その長々の御苦労の間というものは、無量無数不可思議無有等々億那由他百千劫の間、初めより暫くも未だ曾て、貪欲・瞋恚・愚痴の三毒の想いを起し給わず、色声香味触法の六塵に着し給わず、我々衆生に対し、常に愛敬を施し、慈愛して下さること、さながら自己の親属の如く、自分の子の如く、親の如くして下された。又その性非常にすなおにして、曾て荒々しき事をされた事なく、諸の衆生に向つて常に慈忍の心を抱き、一点も、いつわり、へつらいの心無く、亦懈怠して下さる事なく、常に善言を以て飽くまで我々を白法に導き、毎々其のために勇猛にして、退いて下さる事無かつた。かくして遂に一切世間を利益する大願を満足して下されたのであると、お示し下されたのである。

即ちこれ先に言う、親が我々のため一枚の手織を作りて下さる有様にて、一針運ぶにも親は「この着物を子供に着せてやりたい」、一筬打つにも「この衣を纏わせてやり度い」と遂にその遣る瀬無き一筋の糸、一打の筬、一針の縫い目でも、積り〳〵て立派なる親の手織の出来上がつて下された有様である。即ち「何うかして〳〵」との遣る瀬なきこの御心配が、まとまり〳〵、永劫の御修行の結果、遂に若不生者不取正覚の御本願成就となつたのであります。

○

猶これにつき、法然聖人の『西方指南鈔』の中には、阿弥陀仏の本願と、諸願の本願と異なる処を説かせらるる処に「阿弥陀仏の本願には願と共に誓いがあるが、諸仏には本願はあるも誓いがない」という事を説かれてある。例へば薬師如来には、薬師如来で十二の願があり、何れも「衆生を斯うしてやりたい」との願であるが、唯願だけで「斯う仕果たさねばおかぬ」との誓がないとお示し下されたのである。これは唯「金をやろう」というだけの金持ならば世間に沢山ある。岩崎は岩崎で難儀して居る者に慈善を施したいと言うし、三井は三井で、三井病院を建て、或は済生会などの設けもあり、遣る〳〵とまで言つて下さる人はいくらもあるのである。併しながら「貧困の者に遣りおおせなくてはおかぬ。若し遣りおをせなくば金持とは言われまい」という誓いであるとは、大きに趣きが違うのである。「若し衆生が病気本復を望むなら本復させる」という願だけであると「其の者に飽くまで言い聞かせ、この我が親心を届けずば親とは言われぬ」とある誓いであるとは、大いに様子が違うのであります。処がそこが諸仏には願だけである。なおも一つ言えば、地蔵菩薩とか、千手観音とかの願にはこの誓いがある。誓いはあるも、これらの菩薩は、まだ仏となつてお出で下さらぬ。たとえば地蔵菩薩にすれば、たとい道行く人に踏まれても、衆生を救わずば仏とはならぬとの御誓いであるも、まだ仏に成つて御出で下されぬ、即ちまだ御修行中のお姿である。「金持となつて救わねば措かぬ」という誓いがあつても、肝腎の金持となつて下さらねば何にもならぬのである。

処が今阿弥陀仏には、其の衆生を助け遂げずば正覚は取らぬという誓がありて、その誓の如く、永劫の修行して下されて、遂にその誓が成就して正覚の阿弥陀となつて下されたのである。即ち『帖外和讃』には

四十八願成就して、　正覚の弥陀となりたまう。

たのみをかけし人はみな、往生かならず定まりぬ。

即阿弥陀仏とは「助けねば措かぬ」との広大の誓願より、その誓いの如く、長々助けるための修行をして下されて、本願成就したところより、自然に現れさせ待ちかね下さるお姿である。

故に阿弥陀仏は、阿弥陀仏ありて初めて我等をおたすけ下さるに非ず、助けるために、広大の悲願より態々現れ出でさせられた阿弥陀仏である。故にこのやる瀬なき仏の御名を聞く一念に、斯くの如き広大の思召なりしかと気づくなり、聞其名号信心歓喜乃至一念なのであります。

○

なお法然聖人には折々この類の御教化がある。

第一、阿弥陀仏の名号が諸仏の名号にすぐれさせてあるのは、諸仏の名号には本願が無けれども、阿弥陀仏の名号は本願の名号であるからであるとの御教化がある。

若し唯南無阿弥陀仏とあるだけならば、南無薬師如来でも、南無地蔵菩薩でも同じである。処が今、南無阿弥陀仏の名号は

「この我が南無阿弥陀仏一つを以て十方衆生を救い遂げずばおかぬ」

との選択本願の名号であつて、その本願より永劫修行の結果、既に阿弥陀仏と現させられたるその仏の御名号なのである。故に曇鸞大師の『論註』の御文には、

不虚作住持とは、本法蔵菩薩の四十八願と、今日阿弥陀如来の自在神力とによる。願以て力を成じ、力以て願に就く。願従然ならず、力虚説ならず、力願相符うて畢竟して差わず、故に成就と曰う。

と、我々は「斯う仕度い、あゝ仕度い」と思う事は思うけれども、私共には実行する力が伴わぬ。又唯金持はありても、それには「どうかして金を届けたい」との願が伴わぬ故、何もならぬのである。

処が今阿弥陀仏は、此の苦悩の我々を見て、この者をどうかして救いたいとの願を起し、そのために長々修行して、遂にその願成就して、我々を助けるために現わさせられたる方便報身のお姿なのである。この者を救うがために、遣る瀬なき救いの親が、一如の都より態々この法界に法蔵菩薩と現れ、其の遣る瀬なき心を以て、この我が親心を、ありとある衆生に知らせて、救わずには措かぬとある広大な思召なのである。故に十方の諸仏、観音は観音の利益を説き、薬師には薬師如来の願があるも、これはそれ〳〵各種の方面より各種の御縁を結びて、お慈悲に引き入れ下さる別願であつて、その本意はと言うと『大経』の中に

十方恒沙の諸仏如来、皆共に無量寿仏の威神功徳の不可思議なるを讃歎したまう。

と仰せられ、即ち十方の諸仏如来は、この阿弥陀仏のお慈悲を知らせるために、十方の世界に現れて下さるのがその御本意なのである。譬えば、医師は沢山ありて、夫れ〳〵一応の手術はするも、一応の手術では救われぬ我々である。然るにそこへ飛びこんで『その者を救う妙薬がここにあるぞ』とお知らせ下されたのが弥陀の本願なれば、十方の医師は皆声をそろえて其薬を称讃し、飽くまで十方の病人に勧めて下さる。即ち諸仏それぞれ願はあるも、その出世の正しき御本意は、斯く夫れ〳〵の縁をもつて、その本師法皇の阿弥陀仏の本願を伝えるために、御出世下されたのに外ならぬのである。『正信偈』の中はは又

如来世に興出したまう所以は
唯弥陀の本願海を説かんとなり
五濁悪時の群生海、
応に如来如実の言を信ずべし

とあります。

そこで最後に遠慮なく申しますに、要する処、この他力の教は、斯くあてにならぬ浅間しき世の中に、此の浅間しき者を、飽くまで見捨て給わぬ親ありて、この者を哀れみて下さるという、この親の心を聞く以外に、他に物はいらぬのである。

善財童子の求道

福島政雄

涅槃の否定

南方に城があつて浄達彼岸と名づける。その中に居士があつて、その名を毘悉底羅（びしていら）という。彼は常に栴檀座の仏塔を供養しているということを教えられ、そこをたずねて参るのであります。善財は一心になつて此の居士を訪れます。そして菩薩行、菩薩道を尋ねます。

その時居士は答えて申しますには、我は菩薩の解脱を得ている、その名を不般涅槃際という。涅槃ということを否

も一つ言うと、此の世の組み立ては如何などいう世界観の説明問題などは、一切他力には不要なのである。何と考えて見たとて、我々此世の総ての有様は結局皆業報より出来ているので、これをどう努めて見た処で、我々これより脱れる事は出来ないのである。然るにこのして見ようのない有様を御覧下されて、それが不愍である。と、その者を飽くまでお見捨て無き大悲の仏まし〳〵て、我々に斯の広大の哀れみを加えて下さる。この親の御親切を聞かせて貰う一つである。茲一つが頂かるる処で、最早世の中に総てのものがいらなくなるのであります。

定するのであると言います。結局般涅槃する者は無いと云うのであります。これは思いきつた言でありまして、仏教の最後の境地といわれる涅槃ということを認めないというのであります。特別な言葉のようにきこえますが、これは諸仏が永遠にましますというのでありまして、般涅槃し給うというのは方便の身に過ぎないのである。仏の生命は永遠不滅であるというのであります。

それで此の居士は栴檀座如来塔の門を開く時に、一切の諸仏が出現するという三昧に入ると言います。このようなことを知つているだけであると言います。そこで次の善知識を教えます。二十八番目の善知識であります。

観音の浄土へ

此の南方に山がある、補怛洛迦という。そこに菩薩がある、観自在というのでありますから、観世音のお浄土であるフダラク山をたずねて行けというのであります。居士は偈を説いて言います。

海上に山有り衆宝成る
賢聖の居ます所極めて清浄
泉流帯をめぐらし厳飾を為し
芳林果樹其の中に満つ
最勝勇猛にして衆生を利し
観自在尊此処に住す
汝往いて仏の功徳を問うべし

彼は汝の為に広く宣説すべし

善財は居士の教を深く考えながら彼の山へと参ります。その山の西面、巌谷の中に泉が流れ、樹木が茂り、香のいい草がやわらかにはえているところに、観自在菩薩、すなわち観音様は、清らかな金剛宝葉石上に結跏趺坐し、無量の菩薩が皆宝石に坐しています。そして智慧光明大慈悲法というのを述べ説いていられます。

善財は合掌恭敬して目たたきもせず、善知識の功徳を惟つて居ります。

大悲の説法

菩薩は善財よ、よくこそ来られたと言つて童子の功徳をほめられます。それから善財の願に応じて光明を放ち、宝雲を起し、右手で善財の頂を撫で、さて大悲行門を説かれます。

あまねく衆生の前に現れ・布施・愛語・利行・同事をもつて衆生を摂取すると言われます。これは四摂法と言うのでありまして、布施は、施しをするのでありますが、その際、三輪清浄と言いまして、三つの執着を離れねばならないのであります。施者・受者・施物への執着を離れなければ本当の施しにはならないというのであります。自分があの人にこれ〳〵のものを施したと考えて自分の布施の行を

誇つているようでは駄目というのであります。愛語というのは慈愛のこもつた言葉であります。利行というのは真実の利益を与えるのであります。同事というのは事を同じうするというので、一緒になつて仕事をして苦楽を共にするのであります。観音様は此の四摂法をもつて衆生を御自分の胸の中におさめ容れられるのであります。

或はまた種々の微妙な姿形をあらわして、或はまた善く巧みな言葉をもつて、或はまたすぐれた威儀の方便をもつて、衆生に悟りを開かせられます。また諸の怖れを無くさせられます。観音様を施無畏者と言われるのであります。観音様を念ずれば一切の怖れが無くなるようにして下されるのであります。殺害の怖れ、悪名の怖れ、色々な病気の怖れ、愛する人に別れねばならぬ怖れ、怨みのある人にあわねばならぬ怖れ、憂悲愁歎の怖れ、ほしい物を求めても得られない怖れ、大衆に対する怖れなどが無くなるようにして下されるというのであります。

若し我が名を称すれば、若し我が身を見れば、皆一切の恐怖を免離し、障難を滅除し、正しい念が現前する。と観音様が仰せになり、更に偈文をもつて、この解脱の意味を明かにせられます。観音様の御名を称えることによつて一切皆解脱するというのであります。

牢獄にあつても、利剣毒箭の害にあう時も、訴訟の時も怨みを受けても、我名を称うれば害せられない。怨んでいる人から深い流や、火坑におとされても、若し能く至心に我が名を称えたならば、一切の水も火も能く害することがない。厄難も、憂怖も、欺誇も、我が名を称えることによつて自然に止む。父母に対しても承順することとなり、内外の家族も常に和合する。若し能く至誠に我が名を称うれば、一切の所願は皆円満する。浄土に生れて十方一切の仏をあまねく見る。無慈悲や貪瞋などの悪業や様々の衆苦も、我が名を念ずれば、我が大悲観自在によつて、諸の惑業を皆銷滅させる。

善財よ、汝は十方世界において、あまねく一切の善知識につかえ、専ら修行を心がけて懈る心がなく、仏法を聴愛して厭き足ることが無く、若し能く法を聞いて厭き足ることが無ければ能くあまねく一切仏を見るであろう。と、観自在菩薩は説き終つて、自分はこの法門を知るばかりであると言われます。

善財はこれに対して、観音様の諸徳を讃歎します。色々の功徳を述べて最勝威徳大仙王は、三毒を悉く銷除し、福智無涯で、大海の如く、衆生を調伏して懈り倦むことが無いと言つて讃歎します。

此の観音様の功徳は法華経普門品に述べられてあることと相応じて、大悲のはたらきを深く感ぜしめられるのであります。高楠順次郎先生の御生前に承つたことでありますが、東洋諸国で最も広く行われているのは観音の信仰であるということであります。ただその信仰が迷信的になり易いので注意せねばならぬことであります。近角常観先生も観音様を深く仰いでいらせられました。ただ観音様は阿弥陀様の夾侍(けうじ)でありますから、観音様中心になるのは誤りである、「つゝしんで夾侍に事(つか)うることなかれ」ということがあると、先生は私に仰せられたことがあります。併し先生には観世音讃仰の長い詩がありますし、先生の御一生はお慈悲、お慈悲とお説き下さつたのでありますから、仏陀の慈悲のあらわれとしての観音様とは深い関係があると思われます。

飛行の菩薩

さて善財の求道に立ちかえるのでありますが、童子が観音様の諸徳を讃歎し終りますと、その時、東方の虚空の中から、ひかりかがやく一菩薩が飛んで来るのであります。正性無異行菩薩と言います。

善財はまた此の菩薩に菩薩道をたずねます。それに答えて、此の菩薩は普門不動速疾行を得ていると言います。動かないでどこにでも速かに行くというのでありましようか。東方から此の土に来るのに不可説の多くの世界を経由しますが、一々の世界に我は皆あまねく入るのであると言います。一切世界に充満しているというのであります。そして次の善知識を教えます。

第三十の善知識

南方に城がある、為門主と名づける。その中に神があつて大天と名づけると言います。善財は菩薩の広大な境地が開けて、それから大天を訪ねます。大天はその解脱を雲網と名づけ、先ず善財のために金銀やその他諸の宝の集り、一切の五欲を満足するものを示し、善財に此の物を取つて施しをせよ、と言います。その次には人間の様々の貪着や五欲不浄の者を救う方法を述べます。

先ず端正な可愛い女の身を現わして見せ、その心を悦ばせ耽着させる。それから命終の有様を現して見せ、その身がただれて鳥や獣に食われている有様を示す。その次には羅刹女のおそろしい有様を示す。それから説法するというのであります。それは戒を守るということを懇切に説くのでありまして、説き終つて自分は此の雲網解脱ということを得ているばかりであると言い、次の善知識を教えます。

善財の果報

此の閻浮提すなわち須弥山の南の世界にある摩竭提国の菩提道場の中に大地を司る神があつて、その名を自性不動という。その地神を訪ねよと教えるのであります。

善財はその教のまゝに参ります。その大道場は荘厳な道

場であります。その時地神は善財に告げて言います。

善財童子よ、汝は此処で以前に善根をうえている。それを汝は見たいのであるか、と問いましたのに対して、善財は、地神の足を礼し合掌して、見たいのであります、と答えます。その時地神が足で地を踏みますと、百千億の宝蔵が自然に湧き出て来ます。地神は告げて言います。

「善男子よ、此の宝蔵は汝につき随つて行くのである。これは汝の昔の善根の果報である。汝の福力の守護するところである。汝はおもうまゝにこれを用いて宜しい。善男子よ、我は難摧伏智慧蔵という解脱を得ている。常に此の法をもつて円満に衆生を成熟させている」と。それからその境地を述べ、遠い昔に仏に値い此の法門を得た旨を語ります。

これで粗雑ながら第三十一の善知識を終ります。ここで一つ注意すべきことは此の地神が、善財童子の過去の善根の結果を示すことであります。童子は熱心な真実な求道によつて大地に様々の美しい善根を植えつけたのであります。それを百千億の宝庫というたとえで示してあると思われます。大地は煩悩の総体の象徴とも見られますから、善財はその真実の求道によつて煩悩を転じて菩提としたということになるのであります。華厳経の叙述は広大無辺でありますが、私どもの現実生活を離れたものではないのであります。

善財童子の善知識は菩薩の五十二位を代表すると言われていますが、文殊菩薩は最初の十信の位を代表するのでありますから、十住、十行、十廻向の善知識を経由して、それから十地を代表する善知識ということになりますが、その第九地を代表する善知識までは四十華厳では夜神となつていますが、六十華厳では夜天となつていまして、この地上を離れた天であるかのように感ぜられます。その叙述も非常に委しくまた広大で、理解することがなか〳〵にむつかしいのでありますから、これを割愛して、ただ第十地の善知識が六十華厳では、釈迦女瞿夷ということになつて居り、やゝ理解が出来ますので、此処を述べて見ましようかと考えています。そして六十華厳によつて述べましようかと思つているのであります。

× × × × × × × × × ×

『水の味』

高原　憲

何もかも我一人のためなりき今日一日のいのちたふとし
あすありと知るよしもなき我なれば今日一日を生き抜かんと念ふ
見苦しき人の姿に我を見んわが顔ながらえ見ぬわれは
水の味味なき味をしりえてぞ無碍の天地に通ずる心
ゆれながら磁針の北をさすがごと我が足許は西へ向はん
本願の船には乗れど煩悩の船のともつなはなしかねつも

萬行と一行と大行

花田正夫

仏道を学ぶ上に大切なことは、教法を聞いてそれを実行して身につけ、本当の悟りをひらくことであります。聖覚法印の『源空上人伝』に、

「ある時、上人が聖覚に語られました。十五の時叡山に登つてから四十三まで、奈良や叡山のあらゆる仏教の宗旨を残らず学び、悉く習つたが、はじめの入門は異つていても、究極はみな同じで、万人に本来そなわつている仏性をさとりあらわすことで、みな一致である云々」

とあり、これが仏道の目的であります。古歌にも、

分けのぼるふもとの道はことなれど
おなじ高根の月を見るかな

と詠まれ、誰もよく知るところであります。

さて仏性をさとりあらわすために、万行諸善の道がとかれてあり、その代表的なものに三学と六度があります。

三学とは、戒律を厳守して身を調え、清く静かで乱れぬ禅定をおさめ、そこに自然にかがやき出る智慧、それは単に種々なことを憶えているという知識ではなくて、深くものの道理を照らす力であります。

六度とは、布施によつて貪欲の心をおさめ、戒律によつて生活を整え、忍辱によつてあらゆる苦難を越えて、物事を成熟せしめ、しかも飽くことのない精進努力によつて、不動の心と明かな智慧の眼をひらいて、仏果に到る道であります。

然し一応その筋道を覚えることは容易でありますが、それが身につくことはことに至難なことであります、それも沢山の行でありますので困難はなお〳〵のことであります。昔から「多岐亡羊」と申しますが、路が沢山に岐れていて羊が迷いこんでしまうように、万行諸善の道に志し、修学修行を続けましても、悲しい哉、凡夫の身には、智慧や能力に限りがありまして、遂には行き詰つてしまうのであります。

ここに万行の道に断念して、一行に徹しようとする道が残るのであります。譬えて言いますと、土地を深く〳〵掘り下げて行くと、砂礫やら泥土やらがあり、更に行きますと、地下の水脈に達します。そこでは地下水が自由に交流していて清水が渾々と湧き出て来ます。その様に、何か自

分の能力に相応した一行を選んで、それを何処までも貫徹して行く時に、自然に万行と一味に交流しあう大道に出られるのであります。儒教などでも、仁義礼智信の五常の道を説きますが、仁に徹すれば他の四つは自然に備わり、礼に徹してもその様になると教えられます。仏典では有名な常不軽菩薩の求道物語があります。この菩薩は一切の人々に向つて「貴方も仏に成る人である」と唱えながら礼拝しました。これを忌み嫌う人々もあつて、石を投げたり、棒をふりあげて追いかけるなどひどいことをいたしましたが、菩薩はなおそういう人をも拝み続けて、遂には成仏されたという物語であります。ここに万行に行きなずむ者に、一行成仏の道のあることを知らされます。

仏教二千五百年の歴史を省みる時、各宗の祖師となられた方々は、何か一行に徹しておられて、そこから縦横無尽に法を転じて居られるのがうかがえます。

道元禅師が中国に渡つて、天童山に如浄禅師を尋ねて修行を続けましたが、まだ悟りに到りません頃、寸暇を惜しんで高僧の語録を書写し始めました。そこで兄弟子の一人が「そんなことをして何にするのか」と問詰しますと「自分はまだ道を得ませんが、やがて日本に帰らねばなりません。その時の土産にこの語録を…」と答えたのに対し「そんなものは滓だ。先人の遺物だ。そんなことをする暇があれば、只坐せよ。只坐に徹すれば、そんなものは心底から無尽蔵に湧き出るわい」と痛棒を加えて居ります。これ禅師が生涯を「如法只坐」の一語に貫き通された所以であり ましょう。

以上で万行を含む一行のことは分りますが、私が不思議な御縁から、親鸞聖人の教を聞く身にさして頂きましてから、聖人の教の随所に、その一行も不可能の身である、との御述懐に触れるのであります。『歎異抄』に、

「いずれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし」

「煩悩具足の我等はいずれの行にても生死を離るることあるべからざるを……」

又『正像末和讃』には

正法の時機と思えども、底下の凡愚となれる身は
清浄真実のこころなし、発菩提心いかがせん。
自力聖道の菩提心、こころもことばもおよばれず
常没流転の凡愚は、いかでか発起せしむべき。

とあります。

さて聖人は廿九歳の春まで、叡山の常行三昧堂にあつて阿弥陀仏を中心として毎日々々念仏の行道を、堂僧として勤修して居られました。しかもその間、善導大師や源信僧都の書に導かれての血のにじむ精進でありました。

あゝ然し、はてはその念仏の一行にも行き詰られて、遂に叡山を下られたのであります。

この聖人が、吉水の禅房で聞きとられた念仏は、大行でありました。そこに開発されたのが大信心でありました。大とは、絶対力、仏の不可思議力をあらわします。身にもつ罪業の重さに沈みきつて浮ぶ瀬のない者を救い遂げずばやまじとの不思議な仏力から現われ給う大行であります。

廿年の修行も空しく成仏の道の絶えた聖人が、衆生が如来化するための念仏でなくして、如来が衆生化して下さる如来廻向の名号を聞かれたのであります。

それは、不可称・不可説・不可思議と申すより他にあらわしようがないので、この絶対他力の光照の下に、老少善悪、男女貴賤の別なく、修行の長短浅深多少のへだてなく、一切衆生の闇が破られ、一切の志願が満足せしめられるのであります。恰も船に乗つて海を渡る時、老少男女の別なく、乗客も船員も船を造つた人も、水泳も知らず文字も分らぬ者も皆船の力一つで運ばれる如くであります。

この念仏の大行に聖人はこと足り給うと共に、一切の人々に、南無阿弥陀仏の無碍光を生涯かけて大灯炬として掲げて下さつたのであります。

不二見徹照翁

桑野淳城

翁には、大正十三年秋頃から、終戦後引揚まで、親身も及ばぬ間柄で育てられた。日支事変の時も、

「天津で桑野が一人で困つている、是非天津にやつてくれ。桑野が大工なら自分は左官。家は大工と左官と居なけりや建たぬ。本願寺から派遣せなけりや自費で行く」

と、一年余り自坊を離れて、天津本願寺で活躍して下さいました。

翁は汽車中でも、何処でも読書。有難いところは「一寸聞いてクンサイ」と幾度も読んで聞かせて下さる。

幾十年と「唯除五逆誹謗正法」を毎日繰り返して聴聞せられるので、佐賀市の友人等は「唯除」が来よる、とアダ名していた程であつた。

翁の逸話がある。それは、是山和上の塾に五六年居られて、昌福寺に養子として迎えられた頃のことである。

『或日小便しつゝ考えた。養父は毎日朝湯に入つているが、今日まで一回でも心から「お父さん」と云うたことがない。このまま別れたら、永遠に別れて流転せねばならないのだナア！と思つたので、「父ちやん、湯加減はどうかい」とたずねたら「丁度ヨカ」と父は答えた。「ドウラ背ひとつさすろう」と流し始めると、父はしくしく泣いている。「父ちやん具合が悪いのか」「いいや」といつた。このことが忘れられない』と。

○

歎異抄の第九章まで意訳して、何処へ行つても「聞いてくんさい」と読んで勧められた。翁を偲んで、翁の意訳の第二章を紹介しよう。

○

いずれも遠き関東から身命を惜しまず、たずね来られしこころざしは、真実に助かり、永遠に生きる浄土への道を問い聞かんがためでしようが、さればそれは、

「ただ念仏する」より外は、なんにもありません。

あなたがたは念仏より外に、道理や理屈を聞いてしつかりなろうと考えて、別に奥深いわけでも知りたいと思うていられるのであれば、それは大いなる誤りである。もしそういうことであれば、奈良や叡山には優れた学者が沢山居られるから、そんな人達に逢うて、助かる道があるか無いかよく〳〵聞かれるがよかろう。

親鸞は、二十年という永い間、研究もし、求めもいたしましたが、到底駄目でありました。人間の熱心ぐらいでわかるものならよいけれども、よし命懸けてさがし廻つても自分の力で得られるものではありません。絶対の安心は学問でも道徳でも決して得られるものではないのだが、不思議というか、その求めて得られないものが、恵み与えられる他力の御廻向。願力のお一人働きに目覚めない以上、いつまで経つても救われるときはありません。この親鸞は、道理も理屈もさつぱりわからぬまま、明け暮れ「ただ念仏」させて頂いてお慈悲を喜ぶばかり。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏々々々。

この三世諸仏に捨てられた必堕無間の泥凡夫、何処に取柄のない業人を、どうあつても見捨てておくことの出来たまわぬのが阿弥陀仏。そのたすかる縁のつきはてた汝をたすける親があるぞ。おれの可愛い一人子よ、汝は捨てても親は捨てぬ。そのありべのなりを大丈夫引受けるぞと、絶対の理解と、無限の同情をもつて呼びかけ給う阿弥陀仏に丸々たすけられてお浄土の親里に参らせて頂くのだと、大善知識、法然上人の御説法に預つて、無始以来の夢醒めて、私は私のまま、この親鸞を離れ給わぬ生きた南無阿弥陀仏が始めて拝まれたのです。

こちらからさがし求める仏ではない。先手をかけて向うから名告り出て下さる親様。逃げる者を追つて、遂に如来の御手にこちらがつかまえられて仕舞つたのです。

親鸞は法然上人の御言葉を通して絶対のお慈悲に触れたというか、お呼声を聞いたというか、信じたというか、不思議々々々という外はない。全く私の思慮分別ではない。概念や観念でもない。絶対の御慈悲に打ち敗かされて最早疑おうとしても疑われないことになさしめられて仕舞つた外に訳も理屈もないのです。南無阿弥陀仏「ただ念仏する」だけです。

お念仏が浄土に参らるるたねか、また誰かが云う通り地獄におちる業か、はつきり解らないと云うのですか。あなた方はすぐそういうことばかりをおたずねになるが、そんなことを理解して、それをすぐ信心のように考えられたらいけないのです。そんなことの分るような智慧は初めから持ち合せないのが吾々です。

それでは万一法然上人にだまされて念仏して地獄におちたらどうするかと云うのですか。矢つ張りあなたがたは地獄におちたら損だからおちない様にしたいとばかり思つて左様なことを聞かれるらしいが、この親鸞はだまされて、たとえ地獄におちても、こんなことならば、なぜ念仏したろうか。せぬ方がよかつたと後悔などは断じてしないのです。私は念仏してもし浄土に行けたら大儲けじやと打算的に考えて称えるのではありません。そんなことでなしに、この念仏だけはやめられないのです。

念仏させて頂く身になつた以上は地獄じや、極楽じやと予想する必要はさらにないのです。よし地獄におちて苦しんでも後悔するところはありません。

どうしてそんな恐ろしいことを申すかと云うのですか。よく〳〵自分の胸に手をあてて考えて見なさるがよかろう。私の方にすこしでも力があつて、外にゆかれる道があるのをゆかずに念仏したために地獄に堕ちたのであつたら、これはとりかえしのつかぬことになつた、だまされたのだと云うて後悔もするだろうが、初めから何等の力も持ち合わせないのだから、地獄より外に行き処はないじやありませんか。地獄こそ、のがれられない、私の永遠のすみ家です。

これは自暴自棄で云うのじやありませぬ。まただまされても元々で損なしじやと安あきらめで云うのでもありません。能く〳〵考えて見ると、地獄はのがれたいと思うても自業自得、逃れることの出来ぬ、確実一定のものです。いずれの行も及び難い身で後悔などされる資格のある自

分でないのです。親鸞は智慧の眼のつぶれた、行の足腰のたたぬ、三世十方、何処をさがしても相手になつて下さる仏もない、永久一人ぽつちでたすかる縁のつきはてた自力の全く功なき身と知らして頂いたことが有難いのです。

いよ〳〵自力の手を出そうとして出されぬ、地獄一定の実機を知らして頂いて、ただ念仏する身にさせて頂いたのが不思議な〳〵幸です。

たねとか、たねでないとか、そんなことは問題でない。結果の是非善悪を研究する余裕もなければ、必要もない。そこらあたりは弥陀の御はからいです。

私は法然上人の御教に預つて、同じく念仏して、若し私が地獄に行けば、そこには法然上人も居られ、お釈迦様も阿弥陀仏も居られます。何処に行こうが構つたことはない、親様と一緒です。

それでもまだ、あなた方は地獄でもよいと思われませんか。是非極楽に行きたいというのですか。あなた方は、そう云われることが、余りお芽出度い話で、御浄土からのみ親のお呼声を聞こうとせず、若不生者の御誓はそちのけにしてしまつて、ただ損得問題で地獄じや、極楽じやと云つて居るのじやありませんか。地獄は嫌い、堕ちたら損じや位に思つて居ることが、自分を買いかぶつて居るのです。もつとしつかりなつて極楽に往ける権利でも得られるように考えて、助かろう〳〵として居るのではありませんか。

その助かろう〳〵とばかりするのが、大間違い絶対に助からない地獄一定の浅間しき身ぞと、徹底して知らして頂かねばなりません。自力に見限りがついて、地獄一定と頭を下げさして頂くことが既に御不思議力であります。念仏して地獄におちても後悔せぬと、きつぱりこの親鸞をして云わしむる不可思議な力が見えないのですか。この不可思議の仏智が機の真実に徹底させ、始めて地獄行だと決定させ、落付かさすので、最早うろたえる姿とはちがいます。

地獄行きも私、往生一定も私、地獄行のままが、お慈悲の中です。地獄行きの仕事をやめて、極楽行きの道を進むのではありません。この愚かな地獄の道中そのままが、明るい御浄土に進まして頂いて居るのです。それが不思議な不思議な私の南無阿弥陀仏です。この五劫永劫の親の血の涙で成就された六字のお呼声こそ、私の真実の命であり、光であります。

私は念仏しながら何処に行こうが構わない。逃げる必要もない、隠れる世話もいらない、親鸞が苦しまねばならぬときでも親様と一緒です。親鸞は如何なる苦しみでも誤間かさず一人で引き受け切るのです。苦しみ位なんでしよう。火の中でも、水の中でも、こういうこのままが、大悲願船に乗じて光明の広海に浮んで居るのです。風もなければ波もない。恐ろしいどころか、何たる力強い幸だろう。親鸞は、この愚かなまんま弥陀に助けられまいらすべしとはつきり気付かして頂いただけが有難いのです。

嗚呼不可思議の仏智、若不生者の誓願、この南無阿弥陀仏の名号こそ吾等の唯一の力、絶対の真理、この間違いのない弥陀願力の確実なることを明かにお説き下されたのがお釈迦様、そのお出世の本意を減さず増さずそのままを伝えて私共の手を引いて下された善知識が七高僧、略して申せば善導大師、法然上人です。そうして見れば、法然上人の教によつて救われた本願のままを申している親鸞の言葉も間違いはないと思われる。それはただ智慧の勝れた、徳の高い上人のお言葉だからといつてよい加減にする話じやありません。

法然上人のお言葉によつて直接仏智に触れたのです。仏願力の真実なることは、この親鸞の生活が実際に証明して居るのです。人間生活のそのままの処に願力が加わつて居るのです。これでこそ助かるぞ、と、力を入れる処もなく、これでは助かるまいと心配することも要らず。凡夫のなりで、ウヌボレズ、ヘコタレズ、決定して、白道上を歩まして頂く確実な願力そのままを申して居るのです。失礼ながら一分一厘間違ひがあつては堪らない。勿体ない様だが如来の御代官をさせて頂くというても差支えありません

大分長くなりましたが、私が偉いのでは少しもない。私は智慧の眼のつぶれた愚痴ばかりの私ですが、その私を救い給うお慈悲一つが間違いないのです。おろかな親鸞の信心はこの通りであります。この上は皆さんお慈悲一つに夜が明けてお念仏させて頂くか、それとも外に道があるかどうか、それは皆さん方の御勝手次第ですが、切角遠方から来られた所詮には、決めてもきまらぬがお互の心、何時まで経つても清浄真実な心もなく、虚偽詐偽の悪性者で、西も東もわからぬ奴じやが、それこそ大悲のお目当で、何もわからぬまんま参らせて頂く願力、間に合わせようとして間に合わぬ私じやで、親が居るぞ、必ず救うぞとのお呼声、これ一つ聞かせて頂くばかりです。そのまんまで助かるのです。

たとい人がどんな理屈を持つて来ても、動かされるどころか、いよ〳〵たしかに、我身の幸せを喜ばさして頂くことが出来るのです。南無阿弥陀仏

堂の鈴

流転（一）

佐藤強三郎

その年の秋、一郎は京都宇治の茶店へ営業見習に出かけた。見習とは名ばかり、実は求道の遍歴である。お小夜から逃げて来たのだ。世間の手前、取引先の老舗に籍を置いて、奈良、法隆寺、比叡山、京都、紫野の大徳寺、本願寺と、安心の道を求めて歩き廻つた。各地の講習会、大学の成人講座、キリスト教会など、方々を探しては熱心に傍聴した。だがどうしても安心は得られない。……やがて一年位も過ぎ去つた。

一郎は思う。〈両親は年老いて行く。嘸淋しいであろう。お藤はどうしているか。……自分は商売もほつちらかして金ばかり使つて迷つている。早く何とかしなければならぬ〉と、そわ〳〵して暮しているばかり。信哉が貸してくれた本を時々見た。それには、

『倫理道徳を厳正に実行せんとすれど能わず。苦悶の末死せんとすれど、一旦心霊の問題にふれたものは、死後に無関心たる能わず。遂には生もならず、死も成らず、万策つきたるとき、最後に気付くは絶対の仏陀の慈悲の光である。その結果、かつて倫理道徳に倒れて絶望したる者が、仏陀を信仰することにより、倫理も道徳もみな生き返つて来る……。

哲学は信仰とは無関係なり。世は生滅無常である。個人も同様である。実に測るべからざるは、宇宙人生である。古代より哲学と云うは、智識の学問という意義である。

五官で実在を説明しても宗教に達せぬならば、心を以て実在を説明しても、宗教に達しようはずがない。

人間一度、自己の罪悪、人生の無常を実験して、その煩悶に堪えざるに至つて見れば、冷かなる科学、哲学が何等の効をもち来たさぬであろう』

（人生と信仰。近角常観先生著）

『哲学の職分とか、意義とかについて、一般には多く誤解されているようである。ある人は哲学に対して余り多くの期待を持ち、哲学とは他の諸科学のうかがい得ざる実在の隠れたる秘密をあきらかにするものであるとか、宇宙の原因や死後の生活について、我々に慰安を与えるものであるとか考えている。

然し、かかることは、哲学のなすべきことでなく、また為し能わざることであろう。現代（昭和）の哲学の問題は、種々なる学問のよつて立つ基礎を明らかにせんとするにある』

（現代に於ける理想主義の哲学、西田先生著）

× × × ×

聖徳太子の「十七憲法」第十条

忿を絶ち瞋をすて、人のたがえるを怒らざれ。人皆心あり、心各々執る所あり。彼是なるときは、我非なり。我是なるときは彼非なり。我必ずしも聖に非ず、彼必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ。是非の理誰かよく定むべけんや。相共に賢愚なること、鐶の端なきが如し。是を以て、彼人瞋ると雖もかえつて我失を恐れよ。我ひとり得たりと雖も衆に従つて同じくおこなえ。

これを以て見れば、人生生活において、我等が日常用いるところの是非善悪なる思想は、自己を中心として、自己を善とし、相対的に他を悪なりというのである。

今日、社会問題が、闘争を以て解決せんとする態度は、ここにいたりて、結論として、我是なりということが最も甚だしき罪悪の根源であることが明らかになつたのである。それゆえ、前には我善なりと誇りし心が転覆して、我かくの如き悪しき心では、人も我に齒ずるを恥ずるであろう。何人も賤しむべきものとして我をしりぞくるであろう。という様に、大層へだて心が募つてくる様になつたのである。

かくて私は、我が罪悪のために責められて、煩悶その極に達したのである。これが即ち常識でいう相対的の善は、真の善に非ずという所以である。……真の善ありとすれば飽くまで真実を以て人に向い、遂に他の不実を同化してしまうものでなければならぬ。しかしこれは我々の実験において不可能である。……実は、法然上人が、戒律、智慧が出来ぬと言われたのも、親鸞聖人が、何れの行も及びがたき身なれば、と仰せられたのも、自力作善が出来ぬというのも、畢竟この隔て心が止まぬことである。ここに於いて、とても他人と打ちとけられない反抗闘争の塊たる、我慢なる我を如何にせんか、というのが最後に残されたる問題である。

× × × ×

かく我等は一面には平和を欲し、一面には闘争が止まぬという、如何ともすべからざる精神状態の時、我等が切望して止まざるものは、何人か私が打ちとけ得ざる心持を領解してくれる人はなきか。詳言せば、汝は隔て心が止められ得るのに止めぬのではない。如何に汝が止めようとして

も隔て心が止め得ぬのであると、私の心底を察して、領解して呉れる人はあるまいか。若しかく領解して呉れる人であるならば、たとい私が如何程隔て心を以て其人に向うとも、其人はどこまでもあきれず、私が限りなく心を隔て、飽くまで我を以て向うと雖も、更に意に介せざるのみならず、絶対に不実なる悪しき心を受入れて、これをとろかしてくれること、恰も如何なる沢山なる氷も、太陽の前には何等の碍をなす能わざるが如くであるだろう。

この如き場合には、如何に執拗なる我慢闘争の私も恐れ入りて、心の底から融かされねばならぬ。しかして私（近角）は、終に煩悶の極、日夜彷徨せしため、筋炎という病気にかかり、腫物を切開して身体の病癒えんとする時、不思議なるかな、廓然として心は忽ちその境に達したのである。その時、初めて、その私の隔て心の止まぬのを領解して下さつたが、仏の五劫思惟の選択本願の親心であつたことに気付かされた。既に領解して下さるため、飽くまで私の隔て心を受入れて、無限に隔てたまわぬのが、永劫の修業である。是が大慈大悲の親の真実心である』

（慈愛と真実、近角先生著）

× × × ×

一郎は、宇治に泊つて、あちこち求道の旅を続けて居るが、宿へ帰れば暇ある毎に、色々の本を見た。本を見、人に会い、旧蹟を訪れて道を求めているが、どうしても落着く事が出来ない。……。

流転（二）

京都宇治に居る一郎の様子を見てくれ、と父親から信哉の所へ懇々と依頼して来たので、信哉は宇治へ行つて一郎を訪ね、数日後、京都の円山公園の、有名な枝垂桜のあたりで、再会することを約した。

もう晩春で、葉桜となり、あの賑やかな枝垂桜の公園もいかにも淋しくなつている。二人はベンチに腰かけて、語り出した。

一郎「私は人から教を聞いても覚悟も出来ず、本を読んでも解らぬので、毎日イラ〳〵して気がもめて、不安に暮して居ります。父も年取りましたから、待つていることでしよう」

信哉「青年が、不遇の女に同情し、色々と力添えしているうちに、いつの間にか邪道に陥るものが少なくない。人間が人間を根本的に救うことは出来ないのですね。それは水泳を知らぬ者が、溺れている者を助けようとしても、共に溺れ、共に死ぬようなものでないでしようか。悲しい哉、親と雖も愛する我子を、助け遂げることが出来ないのです。親も子も、共に信仰に立脚して生きなければ、人生の大海は乗り切れないと思う。

悪い者は悪いのだから、心から謝罪しなければならぬ

そして、その責任を取らねばならぬ、と思う」

一郎「女が男に同情して、男の犠牲になるのも、やつぱり駄目でしようか」

信哉「勿論ですね」

× × × ×

一郎は信哉と別れてから、嵐山を廻つて宇治へ帰つた。信哉の話を聞いて、わかる様でもあるが、腰が立たぬ。そしてなお長い〳〵遍歴の旅をつづけている。

新聞に「死を急ぐ若者たち」の題で大きく出ているのを見た。国立公衆衛生院の調査として、

「昭和三十年中の青少年（十五才より廿四才まで）の自殺者の報告である。合計八千二百三十一人、内訳、男、五一四三人。女三〇八八人。その多くは、死の決行前に、親とか、先輩とかに何の相談もしない者が実に多い」と説明してある。

青年の自殺の多いのに驚いた。自殺は非常な罪悪だ。どうしてもしてはならぬと聞いているが、本当におそろしいことだと、深く感じた。

× × × ×

信哉さんは「流転とは心の定まらぬ事をいう。如何によいことを聞いても、読んでも、心が迷つているから、流れころんで、決定しないことだ」と言つたが本当にそうだ。

× × × ×

御和讃を読んでいるうちに、次のものが眼についた。

弥陀の名号となえつつ　信心まことにうるひとは
憶念の心つねにして　仏恩報ずるおもいあり。

誓願不思議をうたがいて　御名を称する往生は
宮殿のうちに五百歳　むなしく過ぐとぞとき給う。

仏智不思議をうたがいて　善本徳本たのむひと
辺地懈慢にむまるれば　大慈大悲はえざりけり。

弥陀の本願信ぜねば　疑惑を帯してうまれつつ
華はすなわちひらけねば　胎に処するにたとえたり。

あゝ、自分には仏恩報ずる思いがない。信心が無いからであろう。口先ばかりの念仏だから、仏の誓願を疑つているのだ。本願を信ぜぬから、いつまでも信心の華が開けぬのだ。丁度母の胎内で、胎児が何時までも生れ出ないで居る様なものであろう。

どうすれば早く出られるか、わけがわからぬ御経や本を読めば読むほど迷つて来て、苦しみが増すばかりだ。

あとがき

残暑も台風に追われて秋空はいよ〳〵晴れて、草も木もみのりをたたえております。私共もまた真実のみのりの時をと願つてやみません。

御案内

九月三十日（日）午后一時半、一道会館にて

佛教講話　白井成允先生

市電、新郊通一丁目下車、東へ一丁半

△近角先生の「三信釈」は、皆様から大切にお読み下さつているとの音信がしきりであります。注意はして居りますが誤植や誤字のおわびを申上げます。真黒い炭団の私に、如来真実の火を常に吹きつけて下さる有難さ、申す言葉もありません。

△善財童子の求道は、最も難解なものとされております四十華厳から、福島先生の御体読の味いを頒けて頂いて居ります。〈善財童子がうしろから文殊菩薩の智恵光に照護されながら五十三の知識を次から次に指図されるままに唯々としてすなおに聞信して進まれ、一念の疑心もなく晴れ〳〵として自己の全分を投げ出して信順されて居ります。そのまゝが浄土往生の先達として私共を限りなく導いて下さるのであります〉

△桑野師は、絶対安静の入院生活、一語々々に心血を注いで下さつた原稿であります、不二見翁には私は直接お目にかゝることは出来ませんでしたが「唯除が来る〳〵」と街人から仇名されるまでに、唯除五逆誹謗正法を常持語とされていたと承るだけで、十分に翁の全貌が踊り出てまいります。

△「堂の鈴」は、佐藤様の独自な持味をもつて書き続けて下さり、読者の方々が息をついて読まれるとの声があります。

△「大行の念佛」は、そこに非常に心うたれながら、書きつくせぬことばかりであります。御賢察下さい。

近角両先生から「どこ〳〵までもおあきれないお慈悲」とか「生きたおまこと」とか、よくお聞かせ被りましたが、不可称・不可説・不可思議の佛の願力の絶対さを、先生独自の御言葉をもつて御知らせ下さつたのであります。そのお言葉が先生の自然の、そして常の仰せとして流れ出る、そこに生きた如来のひらめきを仰ぐことであります。

日程表

毎月第一、二、三日曜午后一時半、一道庵例会。
毎月廿四日、午前午后、昭和区小桜町教西寺法話会。
九月廿六、七日、午后、桑名市西方、西方寺。
十月一日、一宮市千秋町小山、西恩寺。午前午后。
十月二、三日午后。桑名市益生、善竜寺。
十月四、五日、午后。桑名市矢田、善西寺
十月十、十一日。午后。桑名市外小貝須浜

定価　一部　二十五円（送共）
半年　百五十円（送共）
一年　三百円（送共）

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　本田政雄
名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光第十四巻　第九号　昭和三十七年九月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可